

第2章 山城の弥生後期の土器

——京都市左京区岡崎南御所採集の土器について——

飛野 博文

1 はじめに

昭和18年、奈良県田原本町唐古遺跡の発掘調査報告⁽¹⁾によって畿内弥生土器編年の大要が確立されて以来、その細分化の試みは絶えず、近年は地域性をも重視する精緻な研究も活発におこなわれている。その中で、後期第Ⅴ様式から古墳時代前期にかけての土器研究は、古墳から出土する土器が数少なかったことなどの理由から、前・中期のそれに比して遅れていた。しかし、従来の古墳時代研究の主対象であった大規模な古墳とは異なる、規模・

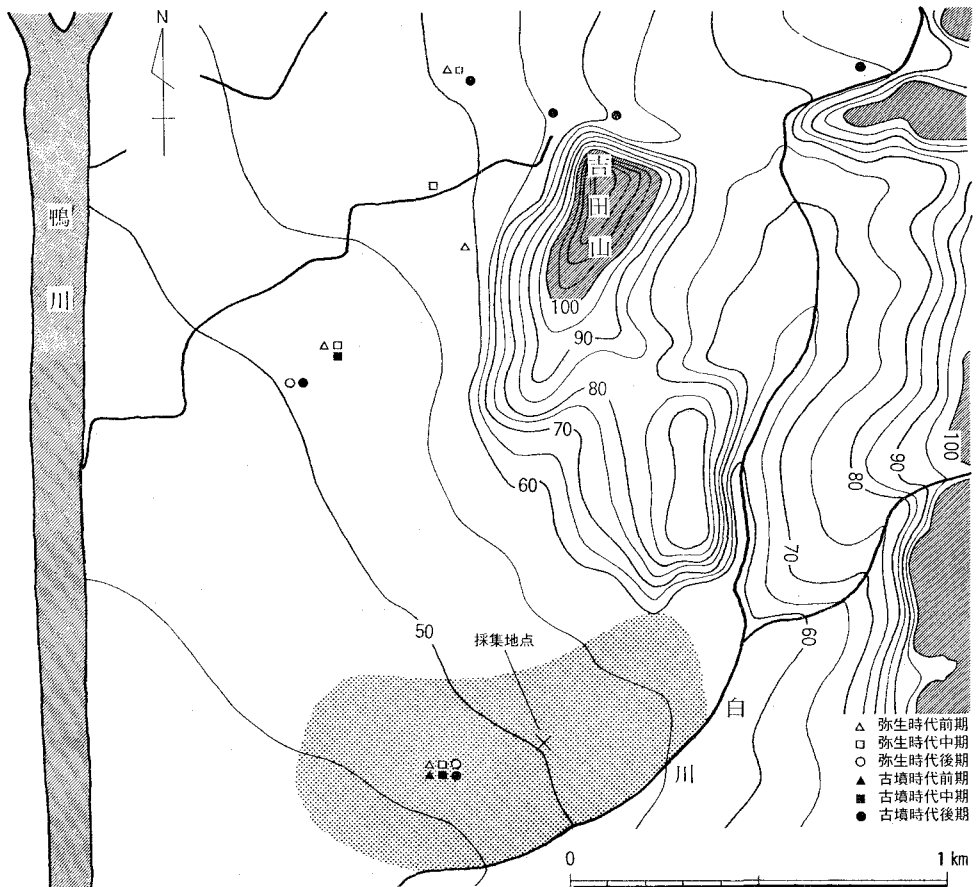


図41 岡崎遺跡とその周辺（明治25年仮製2万分1地形図から作成）

副葬品ともに貧弱な「墳丘墓」⁽²⁾が認識され、かつ、それらの多くが土器をともなうことは当該期の研究に新たな視点を加えることとなった。「土器」と「古墳」という異質な歴史的概念で区分された、「弥生」・「古墳」時代を土器を用いて同じ組上にのせることが可能となったからである。ここに至り、弥生後期土器の研究は、単に土器論にとどまらず、古墳の発生という重要な命題に迫る有力な一方法となった。

田中琢が「庄内式土器」⁽³⁾を提唱し、都出比呂志が中・南河内地域の弥生後期～古墳前期にかけての編年案を発表してのち、華々しく展開されてきた第Ⅴ様式の細分編年案の中にあつて、山城地方、ことに都心と化した京都市域は資料的制約があつてほとんど除かれていた。しかし、近年、山科区中臣遺跡⁽⁵⁾、北区植物園北遺跡⁽⁶⁾や左京区岡崎遺跡などの調査によって資料が蓄積されつつある。

本稿では、昭和40年に梶谷昭氏が採集した遺物⁽⁷⁾を紹介し、山城地方の当該期の土器研究に一助を供しようとするものである。

2 遺跡の概要

ここに紹介する土器は、京都市立動物園の北西交差点を少し東に入つた、標高 50 m 余りの地点で工事中に採集された。そこは岡崎遺跡の一角で、当時の覚え書きによると、現地地表下約 1.3 m ほどの「白川砂」(京都大学構内でいう黄砂)上面で出土したという(図41)。

岡崎遺跡発見の端緒は、昭和34年の尊勝寺跡の発掘調査に際して、大型蛤刃石斧と6世紀代の須恵器杯蓋の出土をみたことにはじまる⁽⁸⁾。次に、45年の京都市立美術館敷地内での円勝寺発掘調査では、弥生後期から古墳前期にかけての大量の土器が出土した。また、56・57年の京都市埋蔵文化財研究所による調査では、弥生中期の方形周溝墓や、後期から古墳時代にかけての数多くの土器や木製品を検出し⁽⁹⁾、相当な規模の遺跡であろうことが推測されるに至っている。

3 遺物 (図42・43)

採集された遺物は破損品のみで、全形を知りうるものは甕形土器(以下、甕と略す。他器種についても同様に扱う。) 1例のみである。また、図示したもの以外にも若干の土器片や、砥石を含む数点の石器がある。以下、口縁形態に着目して分類し、土器の説明をする。

壺(1～8) 二重口縁をもつ壺A、C字形に緩く外反する口頸部をもつ短頸壺B、そしてパレススタイルの系譜を引く壺Cに分類できる。

壺A(1～3) 1は黄白色を呈する。口縁部上半外面には、いびつな円弧を連接した

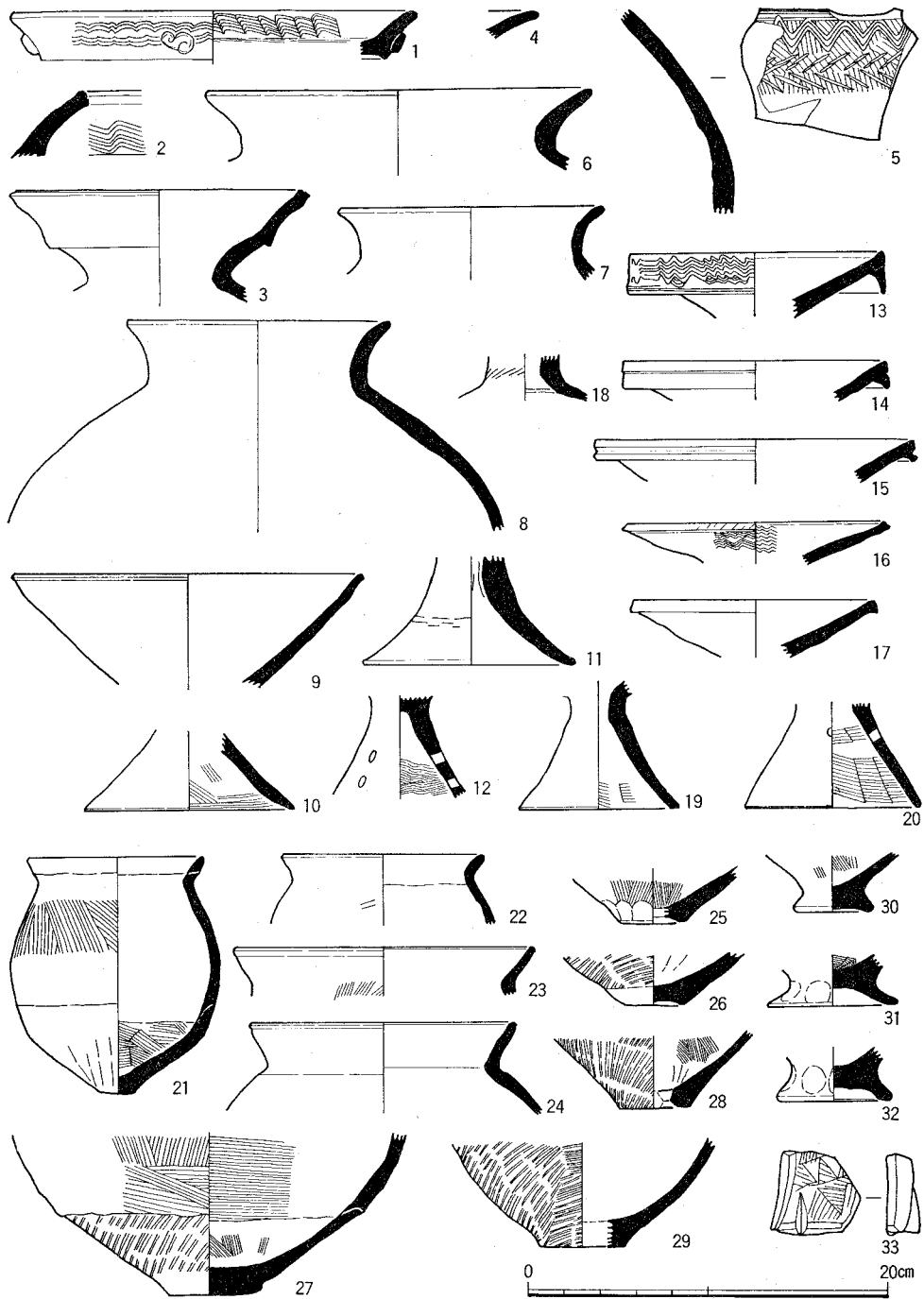


図42 岡崎南御所町採集の土器(1)

ような櫛描波状文を上下に相対するように施したのちに、個数不明のS字状浮文を配する。内面にも同様な櫛描波状文を単体構成で施す。屈曲部以下は外面を指撫で、内面を刷毛目で調整する。2は口縁部端面に1条の浅い沈線を有し、外面には正立させて右方向への櫛描波状文を施す。口縁端部は小さく肥厚し、内面は横位篋磨き、外面は横撫でで仕上げる。3も2と同様に口縁部端面に1条の浅い沈線を有し、口縁部が緩くカーブを描く無文の壺である。調整は篋磨きを主に用いるが、胴部内面は刷毛目のようである。

壺B(6～8) いずれも器表の風化が著しく、6が口縁部内外面を横撫でするほかは調整痕を確認できない。黄白色～灰褐色を呈する。

壺C(4・5) 4・5は胎土・色調などからみて同一個体と思われる。胴部上半には櫛描直線文・波状文、および刷毛目原体によるとと思われる上下2段の刺突を羽状に施す。上段の刺突文が木目痕を明瞭に残すうえに、二度の刺突を重複しておこなうのに対して、下段では上端の一部に木目痕を残すものの、それ以下は篋状工具を用いて押引きしたかのような滑らかな沈線状をなし、刺突方法の異なっている点に注意される。文様帯は縦優位の粗い刷毛目、それ以下は刷毛目調整ののちに入念な篋磨きをおこない、赤色顔料の塗布された痕跡も認められる。内面は黒色を呈し、部分的に横撫でをおこなうほかは、外面と異なる原体を用いて縦位刷毛目を全面に施す。また、口縁部も内外面を丁寧な篋磨きで調整し、赤色塗彩をおこなう。

ここで、1の壺に用いられたS字状浮文について触れておく。S字状文は銅鐸によく使用される意匠であり、土器に施される例は多くない⁽¹¹⁾。さらに、同一意匠の浮文となると、大阪府高槻市安満遺跡9地区土壙⁽¹²⁾3、兵庫県西宮市越水山遺跡採集資料⁽¹³⁾、石川県松任市竹松遺跡採集資料⁽¹⁴⁾などが知見にのぼるのみである。安満遺跡例は、壺の垂下した口縁部外面に櫛描波状文を施したのちに、本例と同様な浮文を4個付す。共伴した土器は壺・甕各1点ずつで、口縁部叩き出し技法や胴部の張り具合などからみて後期後半のものである。越水山遺跡例も二重口縁壺で、口縁部外面に櫛描波状文とS字状浮文を付す。採集された土器の総数は少ないが大半は後期後半の特徴をみせる。竹松遺跡例は異形の器台で、受部下端の拡張部外面に逆S字状浮文と棒状浮文を交互に3個ずつ付す。この種の異形土器の在り方からみて、庄内式並行に位置付けることは妥当であろう。また、類似資料として大阪府茨木市東奈良遺跡採集資料中に、渦巻状浮文をもつ二重口縁壺⁽¹⁵⁾が存する。極めて数少ない例であり、断定することはできないが、S字状浮文という装飾意匠が弥生後期後半から庄内式のころに用いられた可能性は指摘できよう。

高杯(9~12) 9は杯部が直線的に大きく開く、庄内式以降に主流となる形式である。口縁端部は外傾する面を形成し端面直下は強く撫でられてあまい稜をもつ。杯部下端(残存部下端)は明瞭な剝離面をとどめる。調整は内外面とも篋磨きをおこなうが、粗雑である。10は胎土・色調からみて9の脚部と思われる。直線的に大きく開く脚部で、尖り気味の端部に特徴を示す。明黄褐色を呈し、黒斑をもつ。外面は風化著しく調整痕を確認できないが、内面には非常に繊細な刷毛目が観察できる。11は中空の脚部片で透孔はない。脚部外面に篋状工具の圧痕が1~3段に連なって残存部のほぼ全周をめぐる。それ以下は無調整のようであり、圧痕は脚部上半を縦方向に篋状工具で撫でた際に生じたものであろう。しかし、器面の平滑化は十分に成し遂げられていない。内面は篋削りのようで、絞り目も観察できる。12は2段3方向に透孔を穿つ、赤褐色ないし黄褐色の土器で、外面は穿孔後に縦位の丁寧な篋磨きで仕上げ、内面は横位刷毛目調整する。

器台(13~20) 器台の破片は他器種に比して多い。それらは弥生中期以来の筒形胴部をもつものではなく、口縁部に加飾し、細く締まったくびれ部から直線的に小さく開く脚部へと続き、受部径が脚部径を凌駕するなどの点に特徴がある。口縁部に文様帯を付加する器台Aとそうでない器台Bとに分類する。

器台A(13~15) 13は口縁端部を上方へ小さくつまみ上げ、下端に粘土紐を付加して文様帯を形成する。そこに不規則な櫛描波状文と、同じ原体の一部を用いたとみられる直線文を施す。内面は横撫でのちに放射状の細かい篋磨き、外面も同じく篋磨きで調整する。全体に灰白色を呈するが内面はやや赤味を帯びる。14は文様帯接合部に1条の沈線を施して、文様とする。15は文様帯が剝落したようで、端面は無調整である。いずれも内面を放射状の篋磨き、外面を縦位篋磨きで仕上げ、明赤褐色ないし明黄褐色を呈する。

器台B(16・17) 16の内面は篋磨きで調整するものの、径2~3mmの砂粒が沈みきらず粗雑であるのに対して、外面の篋磨きは細かく丁寧に仕上げている。しかし、内面上

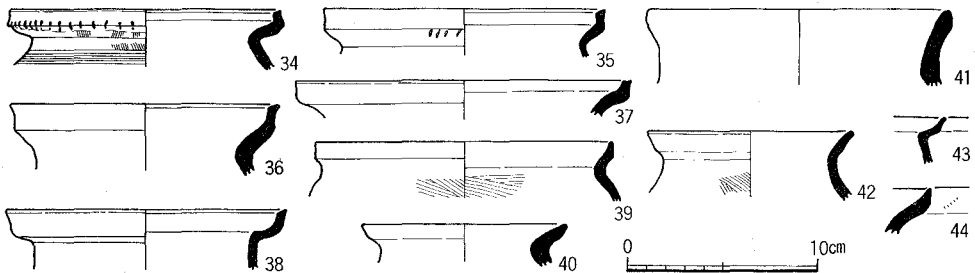


図43 岡崎南御所町採集の土器(2)

半に黒色の付着物があり、内外面の櫛描波状文のうち、内面は残存部全面に施文する一方、外面は上半のみにとどまり、さらに口縁部端面に繊細な刻み目が存在するなどの理由から受部と判断した。波状文は非常に繊細で浅く、斜光線を通して漸く確認しうる程度のものである。外面は2段で構成されるが内面は不明である。器形の特徴としては、他の例に比して受部が浅く、口縁部が上下に小さくつまみ出される点などが挙げられる。赤褐色を呈する。17は口縁端部を小さく垂下させる。外面は刷毛目ののち篋磨き、内面も篋磨きで調整し、赤褐色を呈する。

18はくびれ部の小片である。外面は縦位篋磨きののちに篋状工具による刺突をおこない、それに対応する内面に粘土紐の接合部を示すと思われる段がある。19・20は中空の脚部片である。19は脚端部が水平面をなし、透孔はない。外面くびれ部以下は縦位の、脚端部付近は横位の篋磨きで調整し、くびれ部には受部へと続く刷毛目が残る。脚部内面下半は刷毛目、上半は撫で、受部内面は篋磨きでそれぞれ仕上げる。20は透孔を有するが個数は不明。外面は脚端部まで縦位篋磨き、内面は逆時計回りの刷毛目を施す。

甕(21~27・29・34~44) 「く」の字形に小さく外折する口縁をもつ甕A、布留式に属する甕B、そして近江地方に顕著な受口状口縁をもつ甕Cに分類する。

甕A(21・22) 21は最終調整が粗雑で、口縁部中程と胴部下半に明瞭な接合部をとどめ、後者を境にして調整技法が異なる。外面は底部付近を縦位篋削り、接合部直下を横撫で、直上は不明だが肩部は刷毛目で仕上げ、内面では以下を刷毛目、以上を横撫でで調整する。22は胴部以下を欠損する。頸部内面に接合痕を残し、口縁部叩き出し技法は用いられていない。肩部にはかすかに叩き目が観察できる。

甕B(23・24) 23の口縁端部内面は磨滅しているが肥厚の痕跡をとどめ、外面は緩やかな曲線を描く。肩部の張り具合から推して、布留式の中でもより後出的なものであろう。24の口縁端部は肥厚せずに内傾する面をもつ。また、端面は横撫でして外上方へつまみ出す。頸部には布留式を特徴づける横撫で調整を施し、胴部内面は篋削りする。

甕C(34~44) 受口状口縁をもつもので、甕・鉢のいずれとも決め難いのでここにまとめる。口縁端部に面をもつものをC1、端面をもたないが頸に比較的鋭い稜を有するものをC2、稜も痕跡的で、ただ口縁部外面が緩くS字状に彎曲するものをC3と細分する。

甕C1(34~38) 34・35は甕Cのうち最もシャープなつくりをしている。34は口縁部下端に鋭い稜をもち、その直上から斜め下に針状の工具による刺突をおこなう。頸部直下にも鋭い櫛描直線文を施し、同一個体の他の胴部片によれば、直線文の直下にさらに櫛描

列点文を一段配する。調整は頸部以下、外面を縦位刷毛目、内面は粗い横撫でで仕上げる。35も口縁部下方に鋭い稜をもち、その直下に刷毛目原体によると思われる刺突文を飾る。内外面とも横撫で調整である。この二者はいずれも明赤褐色を呈する。36の頸部内外面に施された篋磨きは幅広く細部の整形もあまい。37・38の造作も雑で、この三者は先の二者に比して稚拙な感をまぬがれない。

甕C 2 (39・43) 口縁部外面を強く横撫でして凹ませ、稜を形成するもので、39は胴部内外面とも横位刷毛目で調整するが、43は小片で調整痕などは不明である。

甕C 3 (40～42・44) 形態からみて受口状口縁土器の末期的なものといえる。調整はいずれも粗雑な横撫でを主とし、44は口縁部外面に櫛描列点文が1単位のみ遺存している。

底部の破片が4点ある。これも甕か鉢か不明なものもあるが、ここにまとめて示す。25は小さな輪台を有し、外面はやや粗い刷毛目と指押えで、内面は微細な刷毛目で調整する。26は4条/cmの叩き目が胴部下端まで及ばず、叩き成形に遅れて底部が完成したことがうかがえる。内面は胴部を篋削り、底部を指押えで調整する。27は球形に近い胴部をもち、接合痕を明瞭にとどめる。外側に盛上の接合部を境にして、外面では下方を3条/cmのやや粗い叩き目、上方を横位刷毛目で仕上げ、内面では上下双方とも同じ原体を用いて方向を異にする刷毛目を施す。叩き目は26と同様に下端まで及ばず、歪んだ底部の側面は横撫でである。29も球形に近い胴部をもち、溝幅の不規則な原体を用いて比較的シャープな叩き目を胴部下端まで刻む。

鉢(28・30～32) 有孔鉢Aと小さな脚台をもつ鉢Bとに分類する。

鉢A(28) 焼成前に底部を内外両側から穿孔する。外面は胴部下端まで4条/cmの叩き目を施す。内面底部にはやや幅広の沈線状の圧痕が残り、クモの巣状刷毛目と同様な手法を用いて調整したことがわかる。その上方は細密な刷毛目を施す。

鉢B(30～32) いずれも脚部の破片で全容は知りえない。脚部の形態・大きさはそれぞれやや異にするが、外面調整はいずれも指押えでいびつに仕上がっている。32の底部内面にはクモの巣状刷毛目が残る。

手焙形土器(33) おおい部前面下端の小片である。前面は粘土紐を貼りつけて、断面三角形に近い形に成形する。外面は刷毛目調整ののちに篋磨きの鋸歯文を階段状に配置するが、構成はかなり乱れる。内面は残存部下端付近が刷毛目によるほかは撫で調整のようである。

4 おわりに

以上が岡崎南御所町で採集された土器の概要である。甕Bが布留式であるほかは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての、小数ながらも比較的にとまった資料であると思われる。この中で注意されるのは、甕Cの比率の高さと、器台の形態が同時期の畿内の多くの例と異なる点である。

受口状口縁土器は、早く第Ⅱ様式に萌芽をみせる近江地方に伝統的な形式である。その特徴は、名称の由来となった小さな二重口縁にあり、多くは口縁部や胴部に櫛描列点文・波状文などを施す。

近江地方と共通する技法・形態をみせる土器は、中期以来山城地方には顕著であるが、無文化を志向する後期の土器の中にあっては、その形態や装飾のために一層極立つ。当該期の受口状口縁土器の分布範囲を西日本の中で拾ってみると、遠く北部九州で出土した1⁽¹⁶⁾点は特異な例であり、通常は大阪平野ですら稀なものである。摂津地方では、後期中葉とされる安満遺跡9地区A5-2土器群中において25%前後を占めるようになり、さらに京都府長岡京市今里遺跡の後期後葉ごろの土壇・住居跡の一括資料では約50%前後にものぼる⁽¹⁸⁾。しかし、今里遺跡から直線距離にして約3kmという卑近な地にある向日市中海道遺跡ではわずかに5.7%を占有するだけだという⁽¹⁹⁾。一方、当該期の膨大な量の遺物を出土した奈良県桜井市纏向遺跡では、報告者のいう「纏向1～3式」の時期に1%足らずを占めるのみである⁽²⁰⁾。資料数や統計処理方法などに差異があるとしても、山城地方が他地域に比して近江系土器の割合が高いであろうことは予想される。ここで問題になるのは今里・中海道両遺跡における占有率の大きな開きである。それが時期差の問題か、あるいは遺跡・遺構の性格に起因するものであるかは、今後の乙訓地方での調査・研究、そして京都市域での同時期の遺跡との比較・検討を経て漸く議論の対象となる問題だが、若干の見通しを後述する。

畿内における器台の出現は、中期第Ⅳ様式とされている。それは凹線文で飾る手法の盛行期であり、したがって器台も例に漏れず、口縁部とともに円筒形の胴部にも凹線文などで加飾する。しかし、第Ⅴ様式になると装飾は衰退し、無文で円孔を穿つものが大勢を占めて小型化してゆく。さらに庄内式に至って、皿形の受部、器高中位よりやや上方にあるくびれ部は中空あるいは中実で、脚部は直線的または内彎気味に大きく開いて、径10cm前後の受部を凌駕する形へと定形化し、続く布留式の小型器台のさがけとなる。

以上が畿内における器台の大まかな変遷である。ここに紹介した資料の皿形に近い受部、

細く締まったくびれ部から大きく延びる脚部など、庄内式の器台に共通する点もあるが、口径が 20 cm 前後を測り、脚部径を凌駕することや、加飾する点などは古相を示すものの、上述した変遷観にそのまま当てはめることはできない。そこで、いくつかの類似資料を列記すると、まず淀川水系では安満遺跡、中海道遺跡、京都市左京区同志社大学岩倉校地忠在地遺跡⁽²¹⁾、同下京区烏丸綾小路遺跡⁽²²⁾などがあり、いずれも口径は 20 cm 前後で、口端面を形成したり、加飾したり相似た形状をみせる。近江地方では、滋賀県大津市北大津遺跡⁽²³⁾、同椋木原遺跡⁽²⁴⁾、高島郡安曇川町南市東遺跡⁽²⁵⁾などのほかに、『弥生式土器集成 本編 2』⁽²⁶⁾にも 2 例が掲げられている。さらに伊勢湾沿岸地方ではより濃密に分布している。他方、大阪府東大阪市瓜生堂遺跡⁽²⁸⁾、東奈良遺跡、奈良県纏向遺跡など、当該期の遺物を大量に出土した河内・大和などの主要遺跡では、この種の器台はほとんど出土していないようである。そうすると、この器台は畿内では傍流に位置付けられ、分布からみて伊勢湾沿岸地方を中心に成立した形式の強い影響下で製作されたものといえる。その初現は、大参義一の研究によると、後期前半の山中期に遡る⁽²⁹⁾。

鴨東の弥生時代は、京都大学北部構内付近で開始されるようだが⁽³⁰⁾、教養部構内 AQ23 区で出土した条痕文系土器⁽³¹⁾が示すように、すでに、その当初から近江・伊勢湾地方との交流がもたれていた。北部構内 BE29 区の方形周溝墓などから出土した土器⁽³²⁾の諸特徴——壺の口縁部内面の瘤状突起・垂下文や半截竹管を用いた櫛描文描出法、甕の口縁部内面に波状文を施す手法など——は、中期における近江・伊勢湾地方などと広く共通する手法であり、いわゆる畿内の土器とはいささか様相を異にする。そうした、鴨東の弥生前・中期の土器の在り方からすれば、佐原真のいう東海型の櫛描文施文法⁽³³⁾による壺 A の 2、伊勢湾沿岸地方の形式に酷似する壺 C・器台、近江系の甕 C などからなる岡崎遺跡の弥生後期後半から庄内式に至る時期の土器組成も自然な現象といえる。

ここに紹介した土器群は、乙訓地方の今里・中海道両遺跡の土器群と比較するならば、中海道遺跡に顕著な、口縁部をつまみ気味に横撫でする甕が存在しないという点で、また、受口状口縁土器の比率の高さという点でより今里遺跡に近い。しかし、乙訓地方の両遺跡の土器組成の差が何によるものかが判明するまでは、岡崎遺跡との異同を即断することはできない。だが、これらの土器が廃棄・供献されてまもなく築造されはじめた前期古墳の分布を参考にして、多少の推論をたてることは許されよう。

乙訓地方では、中期模の有力な前方後円(方)墳が古墳時代前期以降、営々と築造され続けており、また、弥生時代の遺跡も標高 40 m の等高線を上限として、ほぼ全域に存在す

る。その一方で、庄内式の時期の大集落を確認しているという植物園北遺跡や、弥生(中)後期から古墳中期までの多くの遺物を出土している岡崎遺跡などを擁する京都盆地東北部では、有力な古墳は古墳時代を通じて確認されていない。同じころに、山科盆地という閉鎖的な空間の中で栄えていた中臣遺跡でも、それに相応する古墳は存在しない。前期古墳が、「畿内(大和)政権」との一定の関係の下で造営され、庄内式の土器などの広汎な分布から、その契機を弥生後期後葉から、庄内式に至る土器の変化の中に認めうるという考え方をとるならば、乙訓地方には畿内の色彩の濃い中海道遺跡の在り方がよりふさわしいといえる。こうした、集落と古墳との関わりを追求することは、従来あまりおこなわれていないが、古墳出現前後の社会を考察する上でも重要な課題である⁽³⁴⁾と考える。その意味でも、古墳時代中期の方形周溝墓群が新たに検出された京都盆地東北部と乙訓地方は格好の研究材料を提供している。

最後に、本資料を採集され、京都大学文学部博物館へ寄贈して頂いた梶谷昭氏をはじめ、都出比呂志、岡内三真、宮本一夫、宮川禎一の諸氏諸兄には、本資料を発表するに際して種々お世話になりました。記して謝意を表します。

〔注〕

- 1 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（『京都帝国大学文学部考古学研究報告 第16冊』），1943年
- 2 近藤義郎「古墳発生をめぐる諸問題」『日本の考古学Ⅴ 古墳時代 下』，1966年 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号，1977年など
- 3 田中琢「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号，1965年
- 4 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号，1974年
- 5 京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概要』，1981年，1982年ほか
- 6 京都市埋蔵文化財研究所「植物園北遺跡」『京都市遺跡地図』，1980年
- 7 都出比呂志氏は注4の文献で資料として用いている(p. 28 下段)。また田辺昭三氏は、『京都の歴史1 平安の新京』，1970年図27 p. 68において、「東海の地方色をもつ土器」として数点を写真掲載している。
- 8 杉山信三「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮発掘調査報告Ⅰ』（『奈良国立文化財研究所学報 第10冊』），1961年
- 9 円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査(上)」『仏教芸術』82号，1971年 京都市埋蔵文化財調査センター 梶川敏夫氏の御好意を得て資料を実見させて頂いた。
- 10 現地説明会資料のほか、京都市埋蔵文化財研究所の永田信一・平方幸雄・吉崎信諸氏の御好意により資料を実見させて頂いた。
- 11 大阪市文化財協会『瓜破北遺跡』，1980年 pp. 43-45

- 12 高槻市教育委員会『安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—』(『高槻市文化財調査報告書 第10冊』), 1977年 第18図204 p. 49
- 13 村川行弘・森岡秀人「弥生時代」『新修芦屋市史 資料編第1巻』, 1976年 pp. 264-268
- 14 四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成 本編1 前期』, 1971年 p. 75
榑崎彰一編『世界陶磁全集2 日本古代』, 1979年 図版2
- 15 東奈良遺跡調査会『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅰ 図録編』, 1979年 図版92-16
- 16 津屋崎町教育委員会「今川遺跡—福岡県宗像郡津屋崎町今川所在遺跡の調査—」『津屋崎町文化財調査報告書 第4集』, 1981年 p. 54
- 17 注12文献 表1 p. 45 による。
- 18 高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報 1979』, 1979年
- 19 高橋美久二ほか「中海道遺跡発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第3集』, 1979年
- 20 桜井市教育委員会『纏向』, 1976年 表75 p. 482 に依拠し, 外来系土器の占有率15%に, 外来系土器に占める近江系土器の占有率5%を乗じた。以上に示した各遺跡における近江系土器の比率は纏・鉢に関するものである。纏向遺跡の数値は明示されていないが, 近江系とする土器のほとんどは纏・鉢であると理解する。
- 21 同志社大学校地学術調査委員会「岩倉校地体育講義棟建設予定地発掘調査概要」『同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No. 7』, 1976年 p. 24
- 22 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『平安京関係遺跡発掘調査概報』, 1975年 第8図E 13 p. 11
- 23 中西常雄『北大津の変貌—弥生時代から古墳時代へ』, 1979年 p. 9 で器台Aとするもの
- 24 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『檀木原遺跡発掘調査報告Ⅲ』, 1981年 p. 138 で器台Aとするもの
- 25 安曇川町教育委員会『南市東遺跡発掘調査概報』, 1979年 pp. 24-26
- 26 佐原真「琵琶湖地方」『弥生式土器集成 本編2』, 1968年 P 1. 50-26・27
- 27 杉原荘介「伊勢湾地方」『弥生式土器集成 本編2』, 1968年 P 1. 56-202~206, P 1. 57-244~246など 大参義一「弥生土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』史学16, 1968年
- 28 大阪文化財センター『瓜生堂—近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』, 1980年 pp. 202-243など
- 29 注27大参論文
- 30 石田志朗・中村徹也『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』, 1972年
- 31 宇野隆夫・岡田保良「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』, 1979年 pp. 47-48
- 32 岡田保良・吉野治雄「京大理学部遺跡 B E 29区 の 発掘調査」『京都大学構内遺跡調査 研究年報 昭和53年度』, 1979年 pp. 25-27
- 33 佐原真「弥生土器製作技術に関する二三の考察—櫛描文と回転台をめぐって—」『私たちの考古学』第5巻第4号, 1959年
- 34 京都大学教養部構内A P 22区で, TK 23~TK 47型式の須恵器をとまなう, 一辺 10 m 余の方形周溝墓5基, 土壇墓1基を確認している。現在調査中。